うしお

共同募金受配施設
社会福祉法人 竜雲学園
うしお編集室(087)889-0724
再第90号

名誉理事長 追悼

常務理事 細井 俊道

うしお新聞本号は、去る平成29年3月5日、享年84歳で往生の素懐を遂げた故細井俊明竜雲学園名誉理事長の特別号と位置づけて発刊します。前号には、名誉理事長の足跡、つまり、表面的な実跡を載せさせていただきましたので、今回は内面に迫ってゆきたいと思っております。竜雲学園で仕事を共にした旧職員に、当時を思い出していただき、印象に残っていること、教えられたこと、また、エピソードなどを寄稿いただいています。私を含め現職員の知らない名誉理事長の一面が窺えることと思います。

さて、名誉理事長は浄土宗の僧侶でもありました。浄土宗の僧侶は三つの誕生をしなければなりません。第二の誕生は、この世に「おぎゃー」と生まれてくることです。肉体の誕生です。これだけなら誰でも皆できます。第二の誕生とは、「私たちがこの世に生まれてきたのは自分の力ではない。親があり、ご先祖があり、大自然のいのちのあるお陰であります。すべてが自分の手柄ではない、どうぞ今後もお守りください。」と気づくことであります。この時が第二の誕生です。そして、第三の誕生とは、極楽に往生することです。往生とは世間では死ぬという意味に理解されていますが、往生とは「往き生まれること」。極楽浄土へ往って生まれること。誕生することです。しかして、往生とは極楽へ往って大いなる目覚めをする。極楽で生き、やがて仏とさせて頂く、第三の誕生なのです。名誉理事長は、この三つの誕生を成し遂げたのです。

合掌

竜雲少年農場の牧山風景

生活を共感し 共に生きてゆく

竜雲学園と共に生きてきた　あけぼの杉の若芽

まず最初に、本紙面をお借りして、生前、故人に賜りました多くの皆様からのご厚情ならびにお力添えに心よりお礼を申し上げたいと思います。故人が理想とした福祉を実践できてきましたのもひとえに皆様のお支えがあってのことと感謝しております。本当にありがとうございました。

さて、昭和40年にこの仏生山の地に創設された当法人ですが、半世紀という時の流れの中で、福祉は大きな変遷を遂げてきました。特にこの20年は、数年ごとに法律や制度の改正がなされ現在に至っています。少子高齢化が急速に進む我が国は、今後も社会福祉制度の在り方が見直されていくことでしょう。また、一般営利企業の事業参入等により、社会福祉法人の存在意義については、今まで以上に厳しく問われることになると思います。そのような状況の下で、福祉という言葉の本来の意味や役割について考え直してみました。福祉という言葉の語源をたどると「福」も「祉」もどちらの字も幸福やしあわせを意味するそうです。一般的には、「福祉」とは幸せに生きること。「社会福祉」とは、誰もが幸せに生きられる社会と広く理解されています。私が言うまでもありませんが、ただ社会的に困窮されている方の救済を行っているだけでは福祉とは言えず、私たちの実践によって支援や介護を必要とするひとや地域社会全体の幸せに繋げていかなければならないのです。重度の障害があるお子様を持つある保護者の方は、次のように言われています。

「将来とか人生といった言葉さえ理解できていないこの子たちにとって、幸せとは遠い未来にあって今を我慢することではなく、今日、人々に愛され、一日が楽しく健康で有意義に過ごせることであり、その毎日が続いてゆくこと。幸せな毎日の積み重ねが、この子の幸せな一生なのです。」

法律や制度は、その時々の社会の情勢や世論によって移り変わっていきます。しかし福祉の理念が変わることはありません。私たちは、これからも福祉の理念や本質を決して見失うことなく、地域社会の中で社会福祉法人としての責務を果たしていかなければならないと思います。

法人事務局長
細井 孝治

現役、退職職員による名誉理事長についてのエピソード集

「あの時のあの一言」

名誉理事長　細井俊明先生 遷化に寄せて

財津　元生
（昭和48年～昭和59年 在職）

私が竜雲学園に就職して二年目の頃、「この子たちが働く農場を拓く」という計画をお聞きしました。細井先生の背中が本当に大きく見えた時でした。竜雲少年農場の始まりです。その後も次々に新しい福祉施設が建てられていく中で十年間仕事をさせていただきました。細井先生は、私にとって福祉の取り組みの恩師であり、僧侶としての恩師であり、さらに、細井先生ご夫婦に仲人をしていただき見守っていただきました。

細井先生は、行動力もあり、海外に長期間福祉の研修に出かけられ、その話をいろいろな機会にお伺いしていました。私も海外での研修を望んでいたところ、青年交流の海外研修の機会をいただき、大切な経験を得たことが今も役立っております。また、細井先生からよく「本を読みなさい」とご教示をいただきました。当時、本を全く読んでなかった私ですが、時を経て本を読むようになりました。本を読み終えたり、図書館に行ったりした時、細井先生の姿が浮かびます。本を読むことを教えてくれたことを感謝しています。細井先生ありがとうございました。

合掌

細井名誉理事長

デンマーク研修旅行

冨田　智子
（昭和60年～平成15年 在職）

突然の名誉理事長の訃報に驚いた時、私の脳裏には浮かんだのは、ヨーロッパ鉄道の狭いコンパートメントでした。

１９８９年10月、秋から冬へ季節が移りゆく頃、故細井俊明名誉理事長、故立井徳美氏、田中博明氏、同期の細井（旧姓 山下）智代氏との２週間の研修旅行。それは、名誉理事長の友人 千葉忠夫氏を訪ねて、福祉先進国デンマーク視察が目的でした。ローマからコペンハーゲンまでユーレイルパスでの鉄道移動。揺れる寝台列車、深夜到着のミラノ駅、シャワーの出ないホテル、スリの子ども達に囲まれた街角、捜し歩いた人魚姫の小さな銅像、ドアが外れた千葉氏の車、ｅｔｃ…．思いだされるのはハプニングばかり…。また、毎晩街のレストランで当地のビールやワインをくみかわし、様々な出来事にはしゃぐ私達、名誉理事長をハラハラさせたのではないかと思います。そんな中でも、デンマークでは、広大なジャガイモ畑に農業大国の豊かさを目の当たりにし、視察したグループホームでは障害者の方達のどこ

目に少ない状況にあります。竜雲学園が持つ定員枠をニーズの根拠とデータから導き落とし込み、施設の役割を明確にし、建物の構造化を図って、今後も求められる法人でありたいと思います。

竜雲舜虹苑

川原　江美

私は竜雲学園に就職して25年目になりますが、竜雲学園の基本理念「生活を共感し、共に生きていく」の言葉通り実践できているのか、自問自答することがあります。私自身、名誉理事長より直接ご指導を受けることがあまりなかったのですが、舜虹苑に来られた際には、利用者様や職員に笑顔で優しく声をかけて頂いたことを思い出します。

舜虹苑は平成５年に開苑し、入所、通所、訪問、相談等と多岐にわたり運営していますが、今後、超高齢化社会を迎える中で、建物の建替え等検討する時期に来ています。舜虹苑の基本理念「地域の方々へのご恩返し」からも、ハード、ソフトの両面から、皆様に必要とされる施設として進めていかなければならないと思います。また、竜雲学園には、障がい分野と高齢者分野がありますが、分けて考えるのではなく、竜雲学園の利用者様としてニーズに応じて、一元化できる所は行っていく必要があると考えます。

以前、名誉理事長が利用者様や若い職員と話をされているときに「こんな人らを大事にせな」とおっしゃられたことがありました。大事に…。やはり、利用者様に対しては、思いに共感し、何が今必要なのか、今必要なことを見極め支援していくことであり、職員に対しては、働きやすいやりがいのある職場であることだと思います。

常に感謝の気持ちを忘れず、利用者様と向き合い、迷った時には基本理念に立ち戻り、必要とされる施設であるよう進んでまいりたいと思います。

障害者相談支援センターりゅううん
香川県地域生活定着支援センター

川村　圭

昨年、厚生労働省が「我が事・丸ごと」のキャッチフレーズのもと、地域でそこに住む人が支え合って生きていく「地域共生社会」の方針を示しました。今後、障害・高齢…といった分野を超えて、地域のなかで生じる「就労」「子育て」…など様々な暮らしのうえでの福祉ニーズを、専門職と住民同士が支えたり支えられたりしながら暮らしていける地域づくりをしていくことが求められていくでしょう。

また、昨年策定された「再犯防止法」には、罪を犯した人のなかで福祉のニーズがある人への支援の必要性が示され、他分野との連携も求められています。罪を犯した人の息長い更生を支えるとき、医療・保健領域とともに福祉に求められる役割りは少なくはありません。

一見、これまでとは違う大きな変換が求められているようですが、「障害者相談支援センターりゅううん」と「香川県地域生活定着支援センター」の「これから」は、「生活を共感し、共に生きてゆく」―竜雲学園のこの理念にたびたび立ち返ることなしには語れないのではないかと考えます。人には言えない生きづらさや何度繰り返してもうまくいかない想い、その日々のなかで積み重なったその人の今の「生活」に「共感」し、その共感を地域の人へ、他職種他業種の人へ拡げ、「共に生きてゆく」、生きていってくれる人を増やす。そんな試みを地域のなかで。そんなふうに支援センターのこれからを想っています。

月64歳を迎えられましたが今日も元気に登園されています。現在40歳以上の方が約6割を占めており、建物の老朽化、利用者様の年齢差など未解決の課題は山積みです。「かしのき園で働きたい！」と思って下さる方達に、一日でも長く利用して頂くためには何が必要か…ということを常に念頭に置き、名誉理事長のお言葉を一つひとつ思い出しながら解決策を見つけたいと思っております。

ぼだいじゅ

細谷　知弘

私は、竜雲学園創設からの歩みを、また名誉理事長より直接の御指導など実体験として体感していない世代です。浅はかな考えばかりだと日々痛感していますが、ぼだいじゅのこれからを考えさせていただきました。

法人基本理念の利用者様が主体であることは、どんなに時代の流れや、福祉の法制度が変わろうとも、それが『竜雲学園』そのものであり、繋ぎ引き継がれるものだと思います。

さて、ぼだいじゅのこれからですが、生活介護事業においては、利用者様に給与のお支払いが、実現できていない現状にあります。現在、うどん店の箸袋及び紙おしぼりに押印やシール貼り等に取り組んでいただいておりますが、利用者様主体という観点で考えてみますと、利用者様より生み出されるもので、それを実現することも大切なのではないかと考えています。具体的には、芸術性の高い創作活動を中心に、それぞれの利用者様の得意分野を活かした作品や製品を創作し、またその展示・販売まで実現できればと思います。

また、就労継続支援A型においては、引き続きうどん店運営を長く継続させることが、大きな課題だと感じています。一般就労への道筋と同時に、どなたであっても店舗運営に携われる体制の改革が必要だと考えています。

迷いを生じた時は、まず基本理念に立ち返ります。そして、利用者様の可能性を開くこと、また自信に繋がるために今、何が必要であるのか、模索し続けて参ります。

竜雲少年農場

田村　正貴

私が入職した平成7年には、名誉理事長はすでに理事長職であったため、直接ご指導頂いた経験は多くありませんが、入職間もない頃、幸いにも名誉理事長ご夫妻と標津農場で数日間ご一緒させて頂く機会があり、大変優しく接してくれたことを今でも鮮明に覚えています。

少年農場のこれからについてですが、入所施設は県内外問わず高齢知的障害者の支援の課題に直面しています。少年農場は平成22年にバリアフリー化や個室化の改修を行うこと、高齢者施設との職員異動を図ることにより充実したサービスが提供できるように努めています。しかしながら、10年ほど前から現れだした台風の大型化や線状降水帯の発生といった気象状況の変化を開所当初に予想できたでしょうか。歩行移動が困難な高齢の利用者様にとっては、避難警報が発令されても移動せずに済む場所が求められます。

それは高齢知的障害者用のグループホームとするのか入所施設とするのか、複合型施設や介護保険制度との統合も視野に入れて共生型に移行できるようになど、利用者様に一番有益なものとなるように検討していきたいと思います。

入所施設の定員数を県ごとの人口比率で割り出した場合、香川を1倍とすると愛媛が1．36倍、高知が1．5倍、徳島が2．2倍の状況で、香川県の入所施設の定員数は中国地方を含めたとしても2番

か自信に満ちた表情に、少年農場の皆の顔を重ねて、これからの施設福祉を思う時間を持つことができました。私達は、名誉理事長に大らかに見守られ、のびのびと旅をさせていただきました。

私は、大学卒業後から18年間を竜雲学園に勤めさせていただきました。現在も障害福祉の仕事に就いています。当時は「更生・授産」と呼ばれた施設中心の障害者福祉、今は、地域・在宅福祉として障害福祉サービス、「支援」と呼ばれるようになりました。「園生のおかげで我々の仕事があり生活がある、給料分働いているか、常に我が身を振り返らなあかん。」その名誉理事長の言葉は、今の福祉の在り方を示唆されていたのかと感じています。

デンマークの研修にて

仏縁に感謝

村上　則良
（昭和53年～平成26年 在職）

「クボタの製品を使用しなくていいのかな？」名誉理事長の唐突な言葉に驚いた。あけぼの学園の屋根の全面改修を業者の方の協力の下スタッフの皆で行うことにした時の事である。私の父が生前勤めていた会社を記憶されていたのだ。父が亡くなってから、すでに21年経っていた。末期の肝臓がんを患っていた父を大阪の病院に見舞って下さり、不の息子の将来を案じることなく父は鬼籍に入った。名誉理事長のご配慮に接し心底有り難く思った。

福祉とは全く縁のなかった農学部出の私に「利用者様の皆との心のキャッチボールの大切さ」「福祉職はホテルマンたれ」等々。色褪せない言葉をかけていただいた。平成10年にあけぼの学園の施設長を拝命。利用者様の生活記録を開き、名誉理事長が全スタッフの記述に丁寧にコメントした手書きの文字を目にした時の印象は強烈だった。利用者様ひとり一人に寄り添うことの大切さを改めて教えて頂くとともに利用者支援に多くのヒントを授かった。

標津農場に滞在していた折、はるばる訪ねて来られた名誉理事長のご友人の祖父江さんや荒井さんが語る名誉理事長の人となりを聞き、新たな魅力が加わったことも忘れられない。

晩年、事務局の小川さんの車に同乗され牧山をドライブされたり、齢を重ねた利用者様や若いスタッフに満面の笑顔で声掛けされる姿は尊さを感じた。

名誉理事長のお陰で今の自分たちがあります。本当にお世話になりました。

標津農場より望む知床連山

熱き心に

村上　美知代

（昭和52年～昭和56年
平成5年～平成26年 在職）

昭和53年、開墾し始めた少年農場の山で、場長（名誉理事長）、利用者様、職員とシバを植えていた時です。その頃、新天地北海道での酪農が計画されており、場長は広い北の大地での事業や利用者様の生活をリアルに熱く語っておられました。それは、田舎育ちの私にとって、ワクワクする夢のような内容でした。この数分間の出来事は『大人も夢を熱く語るんだ』という驚きとともに忘れない一場面となりました。名誉理事長の多くの夢（目標）は現実となり、その多くは利用者様も職員も幸せな気分にさせてくださったと思います。時代の変化の中で標津農場を手離さざるを得なくなったのは、奇しくも私が場長を拝命した平成22年の時でした。

平成5年、10年のブランクを経て、竜雲学園に復職させていただいた際には、ブランクを埋める為、福祉の勉強をやり直すように指導を受けました。夢を見る事、目標を持つ事の素晴らしさだけでなく、その夢・目標に向かって努力することの大切さも教えてただきました。「一流高校（大学を）を出る事が立派でない。そこに向かって努力した事が立派なんだ。」と話された名誉理事長の言葉が思い出されます。

平成29年3月　定年退職する村上氏に花束を贈呈する名誉理事長

晩年、名誉理事長と少年農場に向かう車の中、「あんたら夫婦は何で、ここで働いてくれているのか?」と尋ねられました。「尊敬できる名誉理事長がいるからですよ。」と答えると「いいこと聞かせてもらったなあ」と言われました。名誉理事長、本当ですよ。

竜雲学園が誇るべきもの
～細井名誉理事長から継承すること～

荒井　吉正

（平成8年～平成14年 在職）

細井名誉理事長が竜雲学園の将来展望に溌剌として想いを巡らせていたであろう壮年期、中央競馬の福祉施設職員海外派遣事業に参加されました。そこで私の父や後に児童養護施設業界で活躍される祖父江文宏氏と出会うことになります。その縁もあって、私が竜雲学園の職員としてお世話になったのは、平成8年のことでした。入職後、少年農場に配属され、平成14年までの6年間、綾上の地で、竜雲学園の職員としてお世話になりました。

当時細井名誉理事長は竜雲学園の理事長としてご活躍されており、施設現場からは一歩引いたスタンスで、学園運営に関わられておりました。そんな訳で、私は細井名誉理事長から直接薫陶を受けた世代ではなく、名誉理事長が築きあげた竜雲学園の文化の中で福祉を学んでいました。そして、現在私は、竜雲学園で培った福祉の基礎を根底に、

各事業所の将来のビジョンを各施設長・管理者より

「各事業所のこれから」

竜雲あけぼの学園

髙木　隆次

平成2年に就職し、あけぼの学園配属となり、新人からの4年間を幸運にも名誉理事長の下で直接ご指導頂きました。4年前から再びあけぼの学園勤務となり、時々当時を懐かしく思い出します。当時、名誉理事長は毎朝、利用者様と一緒にお勤め、ジョギング、ラジオ体操、園生朝礼を行っていました。朝礼では必ず1名を前に呼び出し、肩に手を置き満面のニコニコ顔で何かしら褒めます。利用者様は照れながらも誇らしげでした。しかし時々厳しく叱る事も…あった気がします。とても人間くさい方でした。

職員への指導も熱心でした。代表的なのが「生活記録（利用者様の記録）」です。書くのをさぼる職員には明日は出勤するだろうか心配するほど叱りました。私は小心者なので、真面目に書きました。青い万年筆で細かくアドバイスを頂き、「がんばれ」や「ご苦労さん」等の労いや褒める言葉を沢山書いて頂きました。返却された生活記録を読んでは当時まだ素直だった私は「よしがんばろう!」と励みにしていました。

授産施設としてスタートしたあけぼの学園は、利用者様に働く場を提供する施設から、時代が変わり、殆どの利用者様は就職し、残った方の約半数が60歳以上です。もはや作業を求める年齢ではなく、生きがいや、充実感を重視した日課に転換し、また高齢化に向けた整備が急務となります。今後も迷うことや困った事があると思いますが、「こんな時名誉理事長なら?」を自身の判断基準とし、前に進んで行きたいと思います。

竜雲かしのき園

髙木　弘美

「おまはん、あの子の友達になってやれや。歳も近いし、適任やろっ。」

私が竜雲学園に就職して1年目に名誉理事長より頂いたお言葉です。当時、あけぼの学園での生活に慣れない女性への対応に悩んでいました。経験も浅く未熟な私は「福祉職員とは…」困っている方々を助けてあげることだと考えていました。名誉理事長の『友達』というお言葉に、自分勝手な福祉概念は砕け散ったのです。

一緒に喜び、一緒に悩み些細なことも共感できる…そこにはお互いを思いやる心があり、支援する側・される側といった関係は存在しないのです。名誉理事長は、全てを語ることはせず、視点や発想を変えるためのお言葉（ヒント）を与えて下さる方でした。話を聞いて欲しい時は、いつも歩きながら…でした。課題解決のヒントを求めて、少し足早に歩かれる名誉理事長の後を必死でついて回っていたことを思い出します。

竜雲かしのき園は、昭和52年に香川県内初の通所授産施設としてスタートしました。開所時より利用されている方は、先

埼玉の辺境の地で児童養護施設の運営に携わっております。

竜雲学園の持つ素晴らしい特徴とは何なのでしょう。思うに、それは福祉と福祉以外の異質な何かを結び付け、全く新しい価値を生み出すことです。異種交配による新しい価値の創出、これこそ竜雲学園が誇るべき特質といえます。障害者福祉と山地酪農を結びつけて、少年農場が生みだされる、このような発想を実行できたのが名誉理事長です。名誉理事長の実行力には遠く及びませんけれど、名誉理事長の福祉に向きあう心を継承する1人として末席に加えて頂きたいというのが私の細やかな願いです。

隊長

田中　博明
（昭和63年～平成9年 在職）

私は、小学校5年の時に、カブスカウトに入りました。カブスカウトの隊長は綾田昇さんで名誉理事長はボーイスカウトの隊長でした。小学6年生にボーイスカウトになり私のあだ名は「タンク」で「タンク、タンク」と呼んでもらい、かわいがっていただきました。高校を卒業するまでボーイスカウト活動を行っていました。大学も就職も東京でしたが、今から30年前の26歳の時に香川に帰ってきて竜雲学園に就職し、ボーイスカウト活動に復帰しました。

ボーイスカウトになってから名誉理事長のことは「隊長」と呼んでいました。私にとっては出会った時から50年近く経った今でも「隊長」で、挨拶はいつも敬礼（三指）でした。私と同じ思いの方も多いと思います。

「隊長」との思い出は、多すぎて、この場で書き記すことはとてもできません。毎週のボーイスカウトの集会、豊島や少年農場でのキャンプ、八栗ハイク。また、趣味の読書の楽しさを教えてくださったのも隊長でした。私がいたずらをし叱られたことも昨日のように思い出されます。

昭和45年　日本ジャンボリーで隊長を務める名誉理事長

竜雲学園に就職してからは、私の上司という立場で、仕事を見守ってくれる中にも厳しい指導をしていただきました。「隊長」が亡くなられる前の10年くらいはあまりお会いする機会がありませんでした。

語りつくせない思い出を大切にしたいと思います。「隊長」本当にありがとうございました。

ありがとうございます。

小林　文代
（昭和56年～昭和59年
平成6年～在職）

法然寺境内の掃除をしていると、本堂と祖師堂の渡り廊下から「○○さん。○○さん。」と呼ぶ声がしました。（○○さんは利用者様で私とよく似た体型の男性）ふり向くとニヤニヤ笑いの名誉理事長がおられました。「小林です！」と返事をすると「あっ。ごめんごめん。」とニヤニヤ笑いをされていました。それからも何度かこのような会話があり、○○さんにこの話をすると、「僕は小林さん、と呼ばれている。」ということでした。でもそのように声を掛けてくれることが嬉しく、○○さんと二人苦笑いをしたことを思い出します。注：○○さんは現在スマートになられています。

私が竜雲学園に就職した昭和56年頃の話しですが、利用者様も私も若く、皆で働き皆で遊んでいました。ある日名誉理事長に「自分の職業

名誉理事長に教えてもらったこと

利国　泰宏
（昭和56年～在職）

私が竜雲学園に就職したのは昭和56年4月です。この年新職研修の時間帯があり名誉理事長から「部屋の蛍光灯が切れている安ホテルのような状態にしてはだめだ。施設職員はサービス業であり、サービスの提供を基本としている」と概ねこのような話があり強く印象に残りました。その後の支援員の基本姿勢として心がけています。

4年目には名誉理事長から「色々と経験してきなさい」と励ましの言葉を頂き竜雲少年農場に異動となりました。当時名誉理事長は農場の場長でした。月に1回実施していた各班の利用者様の報告である月曜会が印象に残っています。ピーンと張りつめた緊張感は毎日実施される朝礼とは異なり異空間に存在する感じでした。各支援員が報告を行うと名誉理事長がノートを見ながら「前回このような報告があったが今はどうなっているのか」と思いがけない質問があり慌てて返事をしていたのを思い出します。「常に課題を持ち臨みなさい」と支援員の仕事に対する姿勢が求められていました。また、当時手書きで記載した利用者様の生活記録に対しては名誉理事長から赤のコメントで評価され返却され思いがけない内容に利用者支援の奥深さを感じたものでした。

平成元年児童最後の卒園式

普段は厳しい姿勢でしたが、時に「元気にしているか」と声をかけて頂き思いやりを感じる場面がよくありました。次の仕事のエネルギーとなりました。

最後になりましたが、これまでの数えきれない御指導ありがとうございました。

この子らを世の光に

翠　綾子
（昭和55年～昭和63年
平成6年～在職）

名誉理事長の想い出は、あり過ぎて語り尽せそうにありません。あえて言うなら、私があけぼの学園に勤務していた平成6年夏のことです。

大渇水になり、園の水道も止まってしまい全国から水の支援があった年のことです。法然寺の弘法大師堂をお借りしてうどん屋を営業していましたが、休業してただ断水が解除されるのを待つ日が続きました。そのとき主任だった私は、いつまでもうどん屋を閉めていていいものだろうかと考え直し、うどん屋担当の職員に営業を再開できないかと提案しました。支援していただいた水を使ってやってみます。とのことですぐに営業となりました。後日、名誉理事長に、「うどん屋を再開するのを待っていた。」と言われました。その時、胸を突かれたような感じがしました。園生達のために、今できることを精一杯できているのかと！　漫然と仕事をしていた自分が情けなくまた、「自分で気付き動く」それを見守って下さっていたことにありがたく思いました。「この子らを世の光に」と糸賀一雄先生の言葉をよく口にされていました。その言葉を二心に体現されていたのが名誉理事長の生き方だったように思います。

今私はホームヘルパーの仕事をしていますが、ふと考えてしまうことがあります。自分は名誉理事長の目指していた福祉にどれだけ近づいているのだろうかと。名誉理事長の目指す福祉にはまだまだ届きそうにありませんが、小石を積み上げていくように、一つ一つ私なりのやり方で、これからの竜雲学園の未来の一助となりたいと思っています。

心よりご冥福をお祈りします。

を書く時は何と書くか？」と聞かれました。団体職員かな？と思っていると、「私は、この仕事はサービスだと思っている。だから、サービス業と書く。」と言われました。その時は、何故？と思っていましたが、それから35年ほど経った今、福祉＝サービス業と考えられています。あの時代にサービス業という考えを持たれていたことはすごいと思います。今になりやっとその考えが解りました。名誉理事長と同じ時を現場で送れたことは、ありがたい経験となりました。それは、過去形ではなく現在進行形の「ありがとうございます。」です。

平成12年頃、法人合同運動会の様子

法然寺の仁王様

小川　秀憲
（平成25年～在職）

ボーイスカウトの隊長時代の名誉理事長をご紹介したいと思います。今から50年前に遡りますが、現在の様にゲーム器、パソコン、携帯電話等無い時代隊長と出会いボーイスカウト活動の楽しさを教えて頂いたように思います。仏生山町内の悪ガキを上手く取り纏めキャンプ、ハイキングを通じて、パトローリグ（班）で人との協調性・助け合う必要性及び大切さを率先垂範して、指導いただきました。スカウト活動は、野外活動だけではありません。学校の成績についても親以上に悩んでいたようです。中学から高校へ進学する際には、各スカウトが実力通りに上がれるか、スカウト活動が勉強の邪魔をしていないか等、又、優秀な子どもだけ目を掛けていないか自問自答しながら、活動を見守っていたようです。あるときは先生のように家庭訪問もしながら親とのコミニュケーションも図っていました。剛と柔を上手く使って、『やんちゃ』な面も見せたりして、子どもと同じように野球、ラグビー、相撲等も教えてくれました。自分が観たい映画は、必ずスカウトを高松まで連れて行き鑑賞させていました。しかしながら、この様な楽しいことばかりではありません『嘘をつく』『仲間を虐めた』等、人としてやってはいけないことについては、親同様に厳しい面もありました。

昭和44年頃、ボーイスカウトでの法然寺から八栗寺での往復ハイキングの様子

ボーイスカウトと竜雲学園との関係については、障害児施設の時から、一緒に遊びながら、スカウトの目的でもある奉仕の精神を叩き込まれました。隊長のご家族に叱られますが、一にボーイスカウト二に家庭でした。我々スカウトには、隊長であり兄貴であり親でありの存在でした。『永遠のスカウト』と言う歌がありますが、死して後もスカウトだの歌詞のように名誉理事長も死して後も法然寺仁王様のように竜雲学園を見守ってくれていると思います。

名誉理事長と竜雲学園

田井　貴
（平成8年～在職）

名誉理事長の大きな功績は、今も主たる事業として運営している知的障がい者福祉を発展させたことだろうと思います。昭和35年に精神薄弱者福祉法（のちの知的障害者福祉法）が施行され、知的障がい者福祉が制度として確立された、その後の時代、名誉理事長は、最大限、障害者の権利、自由、幸福追求に先頭に立って尽力されました。制度のことでいえば、平成18年の障害者自立支援法以降、障害者はサービスを選択できるようになった、とされていますが、障がい者にとっては提供される情報、判断できるだけの力が十分でなく、結果的には最大限の幸福追求が行われているとはいえない制度になっております。竜雲学園においては、名誉理事長がそうであったように、どのような時代においても、最大限、利用者にとって何がベストなのか、ダイナミックにかじ取りしていかなければならない、この点は継続して運営していかなければならないと考えております。

私は昭和56年から名誉理事長にボーイスカウトで、また僧侶として、進路、就職、不安ごと、様々な場面、場面で、父のように、かわいがっていただきました。

特に竜雲学園に就職する際、福祉について全く無知な私を理事長として積極的に受け容れていただき、就職後は基礎的なことから経営的なことまで通常職員では得難い、ご指導をいただきました。現在の私があるのは名誉理事長のおかげであり、この恩は絶対に忘れることができないと思っております。

名誉理事長を偲んで

夘目　正俊
（昭和53年～在職）

私は小学校5年時にボーイスカウトに入隊し、当時ボーイスカウト隊、隊長をされていた名誉理事長とのご縁をいただき昭和53年竜雲学園に就職させていただきました。

採用試験の面接で名誉理事長から志望理由を問われ、つい「居心地がよさそうと思ったから」と答えてしまい、大変叱られたことがありました。

就職した当時には、竜雲かしのき園、竜雲少年農場が開所されており、竜雲学園の職員間では「先生」と呼び合わない、園生（利用者様）からも「先生」と呼ばれないと、ことあるごとに言われていたことが強く印象に残っています。

昭和44年頃、津田先生とボーイスカウトとお弁当を食べている名誉理事長

名誉理事長の方針のもと自然環境サイクル農業を中心とした、園芸、酪農、環境整備などが作業種目（日中活動）となっていて私自身もフィールドで先輩職員、園生（利用者様）から学びながら、やがていくつかの仕事を任せていただくようになりました。時には期待に反し失敗することも多々ありましたが、いつも笑顔で見守っていただけたような気がします。

名誉理事長の晩年には気力、体力ともに自然の摂理に導かれるお姿を見させていただき、またお元気だったころの足跡を偲ばせていただくことで人生観を深めていけるのだろうと思います。今まで大変お世話になりありがとうございました。